

おかげさまで、20年

毎年、1年間の感謝を書かせていただく、最終号ですが、今年
は、20年間の感謝をお伝えします。

3歳の息子と1歳の娘の4人家族で、寄居町に移住して、農業
研修に入ったのが、1991年の秋のことでした。2年後の199
3年秋に「菜園・野の扉」として独立。右の写真は、その頃の「開
拓」時代のものです。パワーシャベルで抜いてもらった桑の木
を燃やしています。



夫は週の半分はアルバイトをされていて、週末には家族みんなで、とれた野菜を車に積んで、近くの住宅地を
ひき売りしました。翌94年春からは、野菜セット販売に切り替えて、少しずつ口コミでお客様が増えていきまし
た。その頃からお付き合いいただいている方々には、本当にお世話になっています。ありがとうございます。

お手伝いの人をお願いしたり、研修生がいたこともありますが、今は、半農半パン屋の息子が、半日週3日く
らい手伝うだけです。耕作する畑だけは、初期の10倍ほど、2ヘクタール以上になり、耕作していない隣接地
や里山など、整備しなければならぬ面積ばかり増えています。機械化もこれ以上はできませんし、人的資源
の投入もないとすると、老夫婦2人で、よいこらしよ、と細々やって行けるやり方に、じょじょに移行していくこと
も考えなくてはならないでしょう。さいわい、息子は、結婚して、6月に子供が生まれました。娘も、今春より社会
人となりました。

今思えば、無謀な道を選んで始めたものだ、若かったゆえだなあ、と、少し誇らしく？振り返る、年の暮れで
あります。(泰子)



社会や政治に背中を向け、道はむしろ外側にあるのだと、急いで
きました。でも、実際は、自分たちもまた、尖りきった岬へと向かう道
を急いでいたのだと、今では気付いています。年相応の衰弱を抱え
る私たちがあたりを見渡せば、村々も同様に、周辺部、細部より、築
き上げた姿を失いつつあります。この国があまねく抱える退廃をひ
しひしと感じます。

しかしながら、身の回りにも、そこここにも、新しい命は誕生し、存
分に伸びをしたり、心ゆくまで呼吸しようとしています。個人的立場
より前に出て、世界と向き合わねばならぬ時と感じています。

「おあとがよろしいようで」と言えるように、和解の姿を、みんなで模索するのです。(晃)

来年こそ、皆さまにとって、健やかで楽しい年になるよう、お祈りしています。どうもありがとうございました。

